慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	刻銘と心臓 : メトレの誕生 (1)
Sub Title	Le nom gravé et le cœur légué : la naissance de Mettray (1)
Author	岑村, 傑(Minemura, Suguru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.2 (2020. 12) ,p.82 (99)- 93 (88)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小倉孝誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190002-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

刻銘と心臓 ── メトレの誕生（1）

岑村　傑

『監獄の誕生』

ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』の第4部「監獄」第3章「監獄的なるもの」、全体の最終章でもあるその章を次のように始めていることは、よく知られている。

> 監獄的なるものの組織の形成が完了する日付を私が確定しなければならないとしても、私は1810年と刑法を選びはしないだろうし、1844年、独房への監禁を原則としてうち立てる法も外すだろう。1838年も、それがシャルル・リュカ、モロー＝クリストフ、フォーシェの監獄の改革に関する著作が刊行された年だとしても、おそらく私は採らない。いずれでもなく、選ぶなら、1840年1月22日、メトレが正式に始動した日である[1]。

「メトレ」とは、トゥール近郊のメトレ村に建てられた非行少年更生施設、メトレ農業感化院 Colonie agricole et pénitentiaire de Mettray のことである。

フーコーは、メトレこそは「これ以上ない強度に達した規律の形態、行動を強制するあらゆる先端技術が集約された模範［*SP* 593］」にほかならないと言う。

> そこには「修道院の部分、監獄の部分、学校の部分、連隊の部分 du cloître, de la prison, du collège, du régiment」がある［*SP* 593］。

フランス語では部分冠詞で表される「部分」が、肝要である。メトレは家族で

あり、軍隊であり、工房であり、学校であり、法廷であるが、そのいずれかが、「部分」ではなく、全体と重なるものならば、メトレ独自の強みはない。

> メトレの「家族」長や副長は、完全な裁判官、完全な教師、完全な親方、完全な下士官、完全な「近親」であってはならず、少しずつそれらすべてとなって、独特の仕方で院生たちに関与していかなかればならない［*SP* 593-594］。

そうして、親思いの息子だったり、忠実な兵士だったり、腕が立つ職人だったり、勤勉な生徒だったり、懺悔する罪人だったりが作られるが、つまるところ、それらはいずれも「従順かつ有能な身体［*SP* 594］」である。多様な「監獄的なる carcéral」技術を駆使してひとつの模範的身体を産出するからこそ、メトレは模範たりえている。

「私」

「私が日付を確定しなければならないとしても J'aurais à fixer la date」、「私は選ばないだろう je ne choisirais pas」、「おそらく私は採らない je ne choisirais peut-être pas」と一人称主語が続く第4部第3章の冒頭は、それまでの客観的な、少なくともそう装ってはいる歴史叙述から、唐突に逸脱するかのようだ。歴史的事象に明確な「完了」の日付などあるはずもなく、そのような区切りを提示するとしたら「私」が主観的に引き受けるほかない、という潔さの表れにも見える。

その「私」は、この章の最後にもう一度登場する。

> 私は、この署名のない文で終わりにしたいと思う［*SP* 611］。

ここでも「私」が、連綿と続いていく歴史に切れ目を入れようとする。「署名のない文」とは、その前に引かれている、『ファランジュ』紙1836年の記事である。

> 道徳家、哲学者、立法者、文明に阿諛追従する者たちよ、あなた方の整然たるパリの地図とは次のようなもの、次のような、似た物は漏れなく寄せ集

められた、申し分のない地図である。中心部、第一の城壁のなかには、あらゆる病を迎える施療院、あらゆる貧困が押し寄せる救済院、狂人病院、監獄、男たち、女たち、子どもたちの徒刑場bagnes d'hommes, de femmes et d'enfants。第一の城壁の周りには、兵舎、裁判所、警察、警吏たちの居所、処刑台の用地、処刑人とその助手の住まい。四隅には下院、貴族院、学士院、王宮。外には、中心城壁内の必要を賄うもの、商業［……］、産業［……］、新聞雑誌［……］、賭場、売春、餓死寸前か放蕩三昧で、いつでも「革命の神」の声に耳を傾ける民衆、冷酷な金持ちたち……つまりは［金のため銀のために］万人が万人に敵する激しい戦争［*SP* 611］。

このパリは、社会が据えられる「監獄的なるものの列島 archipel carcéral」、社会と同化した「監獄的なるものの連続体 continuum carcéral」、社会を覆う「監獄的なるものの網 filet carcéral」、絡みつくその「網 réseau」、社会に屹立する「監獄的なるもののピラミッド pyramide carcérale」、社会に織り込まれた「監獄的なるものの生地 tissu carcéral[2]」、を具象するものである。それは「監獄的なる都市 ville carcérale［*SP* 611 et 612］」という隠喩にほかならない。

家族、軍隊、工房、学校、法廷の機能を併せもつメトレもまた、「監獄的なるもの」がすみずみにいきわたった社会全体の縮図であり、隠喩である。第一の、冒頭の「私」はメトレを選び、終盤第二の「私」は「監獄的なる都市」を探し出した。それは、前者の影がいささか薄く、後者がたんに同じ図に上塗りをしている、ということではない。両者相互の入れ子関係こそが鍵だろう。「監獄的なる都市」はメトレを含んでいる。その中心の城壁内に、メトレは「子どもたちの徒刑場 bagne d'enfants」として鎮座している。一方で、メトレのほうも、監獄的なる社会がそこに濃縮されているとするならば、「監獄的なる都市」を含む。かくしてメトレは、「監獄的なるものの網」の目のひとつでありながら、みずからの内にも「監獄的なるものの列島」をそっくり擁している。一部でありつつ全体であること、全体でありながら一部として奉仕すること、それこそが「監獄的なるもの」の特異な存在様態なのではないか。メトレと「監獄的なる都市」の共鳴によって、第一の「私」と第二の「私」の協働によって、示唆されるのは、そのことである。

ジュネ

さて、「私」の活躍には目を奪われるにしても、だからといって素通りすることはできない訝しい点が、この第4部第3章にはある。それは、一人称代名詞が闖入するのとは反対に、その場にいてもおかしくない、いやむしろ、いてしかるべき名詞、ふたつの固有名詞が、姿を現さないということである。すなわち、そこには「ジュネ」と「ドゥメツ」が欠けている。

ジャン・ジュネ Jean Genet (1910-1986) がメトレに関するフーコーの情報源のひとつであったことは、ほぼまちがいない。ジュネは、1926年9月初めから1929年3月初めまでの2年半、メトレに収容されていた。その経験をもとに書かれた、メトレを主要舞台のひとつとする小説『薔薇の奇蹟』を、ジュネの作品を愛読していたフーコーが知らなかったはずはない。そして1971年、監獄情報グループ（GIP）の活動を通じて、フーコーはそのジュネと親交を結ぶ。ふたりのあいだではメトレのことも話題になっていた、という事実には、信じるに足る証言がある[3]。1975年に刊行された『監獄の誕生』の結びで「私」がメトレを選択するのに、ジュネの影響がまったくなかったとは考えられない。しかも、ジュネはメトレの体験者というにとどまらない。生後すぐに孤児院に捨てられて、里子に出され、感化院に入り、志願兵となり、刑務所を知り、流刑寸前にまでいたるジュネは、「監獄的なるもののピラミッド」を一段ずつのぼり、「規律の経歴 carrières disciplinaires［*SP* 604］」をみごとに形成した「非行者 délinquant」の典型でもあるのだ。しかし、そのジュネの名前が『監獄の誕生』に、メトレをめぐる最終章にせよそれまでの別の章にせよ、記されることはない。

時代のずれは、大きいだろう。ジュネが滞在した1920年代のメトレはもはや模範的施設ではなくなって久しく、機能不全に陥って、規律をさしおいて暴力が、看守から少年への暴力、少年同士の暴力が横行する、まさに「子どもたちの徒刑場」に堕していた。『薔薇の奇蹟』で語られるメトレは、悪徳の夢想を涵養する場であり、規範的な身体を錬磨する場ではない。「監獄的なるもの」の完成の象徴としてメトレを顕彰しようとするときに、ジュネの名によってそこに退廃の影を落としてしまうのは、けして得策とはいえまい[4]。

それはつまり、「ジュネのメトレ」となってしまうことを避けた、ということなのかもしれない。第二の「私」が「署名のない sans nom」記事に「監獄的な

る都市」を見いだしたように、第一の「私」もメトレにジュネの署名が付くことをよしとはしなかったのではないか[5]。

ドゥメツ

ジュネの不在以上に不可解なのは、ドゥメツの不在である。たしかに一般には、ジュネの名は知っていても、ドゥメツと言われたら首を傾げる者が大方だろう。しかし、メトレについて語るときに欠かすことができないのは、ジュネよりもはるかに、ドゥメツのほうである。

フレデリック＝オーギュスト・ドゥメツ Frédéric-Auguste Demetz (1796-1873) は、メトレ感化院の創始者である。パリの司法官として少年犯罪を裁いてきたドゥメツは、治安の向上と保全のためには十全な少年更生施設が必須だと痛感し、職を辞して、1839年に父性愛協会 Société paternelle を立ちあげ、それを経営母体としてメトレ感化院を開設する。みずから院長に就任し、当初は盟友のブレティニェール・ド・クルテイユ子爵との共同管理体制で、1852年にド・クルテイユが鬼籍に入ってからは単独で、1873年に没するまでの30年以上にわたってメトレを取り仕切った。

メトレへの献身という一事をもって、フランスさらにはヨーロッパ中の篤志家たちから、ドゥメツは「人類の英雄」とも見なされることになる[6]。1872年7月、監獄施設の体制に関する国民議会調査委員会の席上で、委員であったドゥメツと参考人とのあいだでなされるやりとりは、メトレとドゥメツの関係を、あるいはそれがどのような関係だと考えられていたのかを、教えてくれる。

> フェヴル神父［ベルヴォ刑務所付司祭］：メトレは今日、模範的な施設ですが、しかし、その成功はひとえにその事業に生涯を捧げた人物に負うものです。その方がもうそこにいらっしゃらず治めることのない日が来たら、その小さな社会はどうなってしまうのでしょうか。
>
> ドゥメツ：わたしがもうそこにいないという日が来ても、メトレが今日の姿と変わることはありません、私の事業を進んで助けてきてくれた方々が尽力なさいますから[7]。

フェヴルが言うように、開設から30年を経たメトレが模範的施設でありえているとしたら、それはドゥメツの情熱と手腕を抜きにしては考えられなかった。実際、これより1年数ヶ月後のドゥメツの死を境に、メトレは凋落し、1937年の閉鎖に向かって長く緩慢な死期に入る。現実となるのはフェヴルの危惧であり、自分亡きあともメトレは安泰だというドゥメツの確信は裏切られる。メトレの栄光はドゥメツとともにあり、ドゥメツが去ったメトレは無残である。

原典

フーコーがドゥメツの存在を知らなかった、ということはありえない。『監獄の誕生』の、件の最終章ではない箇所に、じつは、その名前は引かれているからだ［*SP* 516 et 520 note B］。ただしそれは、アメリカに監獄施設の視察に赴き、そこで、囚人を昼夜完全に独房に隔離するペンシルヴァニア・システムの信奉者となったドゥメツとして、である[8]。フーコーは、では、訪米後にメトレを創始したドゥメツについては知らなかったのだ、とするのにも無理がある。メトレに関する当時の資料や現代の文献に多少なりともあたる者が、ドゥメツの名に触れないでいることはむずかしい。実際、フーコーがメトレを語るときの重要な典拠のひとつとなっているデュクペシオの「メトレ感化院瞥見[9]」も、冒頭でこう述べている。

> ド・クルテイユ氏は、なすべき事業のためにパリ裁判所名誉判事であるド・メツ氏 M. de Metz と結束し、じつにそのふたりの篤志の人が努めて力を一にし、倦まず弛まず熱を注いだおかげで、フランスは崇高かつ有益であることこのうえなき施設のひとつを有しているのである[10]。

ではなぜ、フーコーはメトレの名にドゥメツのそれを添えることをしなかったのだろう。考えられる説明はふたつである。ドゥメツに重要性を認めなかったから、なのか、それとも、ドゥメツに重要性を認めていたにもかかわらず、なのか。

前者に立ち、フーコーは、作られたメトレには強く惹かれたにもかかわらず、作ったドゥメツにはそうではなかった、フーコーの目にドゥメツの果たした役割はさほど本質的なものには映らなかった、とするのが、もちろんより穏当ではあ

るだろう。『監獄の誕生』刊行以前、1973-74年度のコレージュ・ド・フランスの講義ですでにフーコーはメトレのことを話しているが、そのときにもドゥメツの名は発せられない[11]。

しかしながら、興味深いことに、もしフーコーがドゥメツに関心を寄せていなかったとしても、『監獄の誕生』でメトレを記述するにあたって、フーコーはドゥメツに多くを負っている。というのも、ドゥメツが控え目な創始者ではなかったからだ。ドゥメツは、自分が創始したものを自賛することに余念がなかった。上にも引いた、ベルギーの監獄総監であるエドゥアール・デュクペシオによる「メトレ感化院瞥見」は、二種の材料に基づいて書かれている。ひとつはデュクペシオ自身が1842年にメトレを視察訪問したときに得た見聞であり、そしてもうひとつが、ふたりの院長ドゥメツとブレティニェール・ド・クルテイユの連名による年次報告書である。「瞥見」では、その数年分の年次報告書からの間接的、直接的な引用が大きな場所を占める。そして、フーコーはそれを『監獄の誕生』に取り込んでいる。

第4部第3章冒頭でメトレ始動の日を「監獄的なるもの」の完成日としたあとに続く、次の一節がそうである。

> いや、ひょっとすると、あの、日付のわからない栄光の日のほうがふさわしいかもしれない。ひとりのメトレの子が、いまわの際にあって、こう言った日だ。「こんなに早く院を離れなきゃいけないなんて、残念だ。」それは、最初の刑罰聖人の死である。おそらくは多くの福者が彼のあとを追ったのだ。院生たちが本当に、日頃からこう言って、身体の処罰をめぐる新しい政治を褒め称えていたとするならば。「ぶたれるほうが好きなのですが、独房のほうがぼくたちのためになります［*SP* 592-593］。」

メトレとの別離を惜しむ言葉も、独房の効用を内在化する言葉も、なるほどどちらもデュクペシオによって紹介されているものである[12]。だが、もとをただせば、デュクペシオはそれらの逸話を、院長報告書のなかで読んだのだった[13]。

また、上で見た、メトレには「修道院の部分、監獄の部分、学校の部分、連隊の部分 du cloître, de la prison, du collège, du régiment」がある、という、あたかも直の引用であるかのように使われている列挙は、おそらく次に拠っている。

さらに、この怠惰で騒がしい集団を統率するには、賢明で、熱意があり、わたしたちのようにこの子どもたちにしっかりと愛情をもって接して、彼らの道徳教育と職業教育に献身することのできる、篤実な人間たちを探す必要があった。彼らが受け入れなければならないのは、田園生活であり、そして、修道院や、学校や、監獄や、連隊の規則 ではない qui n'est pas celle[=règle] du cloître, du collège, de la prison, ni du régiment が、厳格さと細密さにおいて同時にそれらすべての規律に類する qui tient à la fois de toutes ces disciplines 規則である。

「修道院や、学校や、監獄や、連隊の規則ではない」という否定を肯定に転じて、「修道院の部分、監獄の部分、学校の部分、連隊の部分」がある、としたのだろう。一方で、その「修道院や、学校や、監獄や、連隊の規則ではない」は、次の「同時にそれらすべての規律に類似する」とともに、これも上で引いた、「メトレの「家族」長や副長は、完全な裁判官、完全な教師、完全な親方、完全な下士官、完全な「近親」であってはならず、少しずつそれらすべてでなければならない ne doivent être tout à fait ni des juges, ni des professeurs, ni des contremaîtres, ni des sous-officiers, ni des « parents », mais un peu de tout cela」へと変奏されたのだと推察できる。その元の一節をフーコーはデュクペシオの「瞥見」のなかに見つけた、という、そこまではよい[14]。しかしそれはデュクペシオが、こちらはきちんと引用符に入れて転記している、院長報告書の一節で[15]、すなわちドゥメツとブレティニェール・ド・クルテイユが書いた文章そのものなのである。

フーコーは、デュクペシオの引用符をきちんと意識していたのだろうか。自分がドゥメツを原典として書いているということを、承知していたのだろうか。していたのだとしたら、そのドゥメツのことをおくびにも出さないのは、やはり奇妙なことのように思われる。

身体

そこで、もうひとつの説明に傾きたくもなる。すなわち、フーコーは、ドゥメ

ツの重要性を知りながら、あえてその名を伏せたままにしたのではないか、という仮説である。

メトレの報告者からメトレの創始者としてのドゥメツに戻るなら、メトレの完璧にはその院長たちの寄与が必須であり、ひるがえって、そのような院長たちへの絶対的な依存こそがメトレの唯一の、しかし看過できない瑕瑾である、ということは、メトレを礼賛するデュクペシオも明言する。

> しかしながら、正直に言おう。メトレでおこなわれている事業、手本としてしかるべきその事業は、たやすい事業ではない。その卓越した、熱意あふれるふたりの人物の惜しみない結束が、どこで見つかるというのか。たがいに補い、その精神でほかの人間たちを動かして、彼らを導き、先の見通せない困難な仕事をよろこびとともに遂行してもらうことのできる、そのようなふたりの。[……] それこそが最たる難業であると、はっきりと言っておこう。わたしたちはまた、時折、そのふたりの院長がいなくなったらメトレはどうなってしまうのかと、考えたものだ。神にふたりが召されるとき、メトレは避けがたくどうなってしまうのだろう。ほかの者が後を襲うことはできても、わたしたちが危惧するに、彼らの代わりを完全に務めることにはとうていなるまい[16]。

1872年の調査委員会でドゥメツに投げかけられた懸念は、メトレの揺籃期にすでに胚胎し、そしておそらくは宿痾のようにつねにつきまとってきたものだった。

巨星ドゥメツが1873年についに墜ちたとき、父性愛教会の会長は追悼のためのいくつかの計画を発表する。

> わたしたちは決定いたしました。このふたりの恩人［＝ブレティニィエール・ド・クルテイユとドゥメツ］の記憶を呼び起こすために、彼らの名を、院の礼拝堂の、二枚の大理石板に刻みます。ふたりの胸像を大ホールの中央に置き、墓地には彼らに奉じる二基の記念碑を建てます。ド・メツ氏は、最後までメトレのために鼓動したご自分の心臓を、院に遺贈してくださいました。託されたそれを壺に納め、[……] ド・クルテイユ氏の墓のおそばに安

置します[17]。

メトレには、たしかにドゥメツの名が消しがたく刻まれている。メトレはドゥメツの墓であり、記念碑である。さらには、聖遺物さながらにドゥメツの心臓を納めるメトレは、ドゥメツの身体そのものである。

だからこそ、フーコーはドゥメツの名を、創始者としても報告者としても、記さなかったのではないか。『ラ・ファランジュ』紙の「署名のない」記事を好んだように、そして「ジュネのメトレ」を嫌ったように、「ドゥメツのメトレ」、ドゥメツの刻銘のあるメトレを遠ざけたのではないか。フーコーにとってメトレは、監視所に誰がいても、あるいは誰もいなくてもかまわず機能する、パノプチコンに連なるものでなければならなかったはずだ。それは生を馴らすための装置であり、死を溜めた墓であってはならない。遍在する権力が汎用する技術でなくてはならず、一個の人間の偉業を謳う記念碑であってはならない。ドゥメツの身体が王の身体と見まごうばかりにそこに現前することは、あってはならなかったのだ、とは考えられないか。

メトレの誕生

もしフーコーが故意にメトレの無名化を図ったのだとしても、それを責めようというのではない。フーコー自身はしかし、先手をとり、「私」を登場させて、その主観に責めを追ってもらうつもりだったのかもしれないが。いずれにせよ、ドゥメツの名の欠落についてここまで考察してきたいま、湧き上がってくるのは、ではその「ドゥメツのメトレ」がいかなるものだったのかを知りたい、という好奇心である。ドゥメツがメトレに託した理想とその実現のための奮闘を再構成することに、抗いがたく誘われるのだ。

それはすなわち、「私」の力業によって 1840 年 1 月 22 日という日付、点に、還元されてしまったメトレに、時間の厚みを返すということでもあるだろう。たとえば、フーコーはこう書いている。

> [……] メトレは監獄だが、それは片足をひきずる監獄である。監獄、なぜならそこには法廷で裁かれた非行青少年たちが収容されていたからだ。しか

し、監獄とはやや別のものでもあって、というのも、そこに閉じ込められていたのは、容疑をかけられながら刑法第66条にしたがって無罪となった未成年者たちと、18世紀と変わらず父権懲治の名の下に拘束された寄宿生たちだったからである［*SP* 600］。

だが、実際には、父権懲治を放蕩息子たちに施すメトレの「父の家 Maison paternelle」が稼働し始めるのは、1855 年、メトレ本体の開設から 15 年後のことである。「父の家」で課される改心のための生活は、通常の院生たちのそれとはまったく異なり、しかしながら「父の家」が完成して初めてドゥメツの求めるメトレは完成したのだといえる。

ドゥメツの夢とはどのようなものであり、それはいかなる路程を辿って結実にいたったのか。メトレの誕生を追う。

註

1 Michel Foucault, *Surveiller et punir. Naissance de la prison* (1975), éd. Bernard E. Harcourt, dans *Œuvres*, t. II, coll. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2015, p. 592. これ以降この文献への参照は、本文でも註でも、*SP* の略号とともにページ数を示す。なお、本稿の引用はすべて、既訳があるものについてはそれに多くを教えられながら、筆者が訳出した。

2 列挙したのはいずれも第4部第3章で用いられている表現である。

3 *SP* 1495, note chapitre III-1を参照。

4 次も同様の見当をつけている。Sophie Chassat, « Le cercle carré du carcéral : Mettray par Foucault », dans *Éduquer et punir. La colonie agricole et pénitentiaire de Mettray (1839-1937)*, dir. Luc Forlivesi *et al.*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2005, p. 217.

5 メトレをめぐるジュネとフーコーの関係については、別の機会に本格的に検討したい。それは、ジュネとメトレという、より広範な問題系のなかに組み込まれることになるだろう。ひとつだけ貴重な事実を紹介しておくなら、1980年代、メトレを舞台にしたシナリオ『壁の言葉』を書くにあたってジュネが収集した資料が現代出版記憶研究所（IMEC）に保管されていて、そこには、『監獄の誕生』第4部第3章の最初のページにジュネが下線を附したものが含まれている。

6 *Enfance et justice au XIXe siècle*, dir. Marie-Sylvie Dupont-Bouchat et Éric Pierre, Presses Universitaires de France, 2001, p. 64.

7 Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur le régime des établissements pénitentiaires*, t. I, 1873, 25e séance, samedi 27 juillet 1872, p. 319.

8 当時の独房をめぐる議論については多くの研究があるが、梅澤礼『囚人と狂気』（法政大学出版局、2019年）は日本人研究者による最新の成果である。

9 Édouard Ducpetiaux, « Notice sur la c olonie de Mettray, près de Tours (Département d'Indre-et-Loire) », dans *De la condition physique et morale des jeunes ouvriers et des moyens de l'améliorer*, t. II, appendice III, p. 360-394, Bruxelles, Méline, Cans et compagnie, 1843.

10 *Ibid*., p. 360.

11 M. Foucault, *Le Pouvoir psychiatrique. Cours au Collège de France (1973-1974)*, éd. François Ewald *et al*., Seuil / Gallimard, 1973, p. 86 et 110.

12 É. Ducpetiaux, *op. cit*., p. 383 et 377-378.

13 « Rapport des directeurs de la colonie », dans Colonie agricole de Mettray, *Assemblée générale des fondateurs,* tenue, à Paris, le 20 mai 1841, Tours, Imprimerie de R. Pornin, 1841, p. 22 et 29.

14 É. Ducpetiaux, *op. cit*., p. 361.

15 « Rapport des directeurs », dans Colonie agricole de Mettray, *Assemblée générale des fondateurs*, tenue, à Paris, le 23 janvier 1842, Paris, Imprimerie de H. Fournier, 1842, p. 6.

16 É. Ducpetiaux, *op. cit*., p. 392-393.

17 « Allocution de M. Drouyn de Lhuys », dans Colonie agricole et pénitentiaire de Mettray, fondée par MM. De Metz et De Courteilles, en 1839, *Assemblée générale des fondateurs, trente-quatrième année*, Tours, Imprimerie Ladevèze et Rouillé, 1873, p. 15.